

旅への思い

——芭蕉と『おくのほそ道』——

平泉
ひらいずみ

(口語訳)

藤原氏三代の栄華も、長い歴史から見れば一眠りのようにはかなく消え、平泉の館の南大門の跡は、一里ほど手前にある。秀衡の館の跡は田野になり、庭の築山にあたる金鶏山だけが昔の形を残している。

まず、義経の館であった高館に登ると、北上川が眼前に流れているが、この川は南部地方から流れてくる大河である。衣川は、秀衡の三男、和泉三郎忠衡の居館であった和泉が城の周りを巡って、高館の下で北上川に流れこんでいる。秀衡の次男の泰衡ら藤原一族の旧跡は、衣が関を間に置いた向こうにあって、南部口をおさえて夷の侵入を防ぐためのように見える。それにしても、義経が忠義の家臣をえりすべてこの高館にこもって戦ったが、その功名も一時の短い間のことだ、今はその跡はただくさむらとなっている。

「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」

という杜甫の詩を思い、笠を敷いて腰を下ろし、いつまでも懐旧の涙にくれていた。

夏草や兵どもが夢の跡